

校 園 名： 大阪教育大学附属平野小学校

所在地：〒 547-0032

電話番号：06-6709-1230

記載日：平成28年5月20日

記載者：丸野 亨

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

本校は、「ひとりで考え、ひとと考え、最後までやりぬく子」の育成を教育目標としています。およそ半世紀続くこの教育目標のもと、知的好奇心に基づく主体性、支え合う協調性、自己実現に向かう創造性を育むべく教育活動にあたっています。

一人ひとりの子どもへの深い理解、子どもの思いや願いを大切にされた細やかな指導を大切にすることが、本校の校風です。

また、保護者による教育活動への参画も大きな特色です。保護者参画とは、保護者が教育活動のPDCAサイクルに関わることです。学習のねらいと計画を理解し（Plan）、学習活動の指導と支援を行い（Do）、子どもと共に活動をふりかえり（Check）、さらなる改善に貢献して（Action）いきます。学校教育の当事者として、また、チーム学校の一員として保護者の方々に学校づくりに関わっていただいています。

貴校の卒業生の活躍状況について：

① 追跡調査はしていません。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

① 調査という形で追跡はしていませんが、OB会への出欠回答に「近況報告」欄を設け、情報収集しています。

② 勤務経験者のうち3分の2程度については把握しています。情報は、学校園が持っています。

③ 文科省教科調査官、市町村の教育長、統括指導主事、校長会会長、校長、教頭等管理職、教育研究会研究部長等として、日本・地域の教育の発展にご尽力、ご活躍されています。また、教育学・教科教育学等を専門とする大学教員としてご活躍の勤務経験者が多数おられます。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

(1) 経済産業省と連携したエネルギー教育

6年生総合的な学習の時間において、それまでに身に付けた「先を見通す思考力」「人と関わり学ぶ態度」「環境への実践力」を発揮しながら、「未来のエネルギーを考えようプロジェクト」として単元を進めます。太陽光や風などの自然エネルギーを電気エネルギーに変換する発電について考えることが、大量の電気エネルギーを消費する現代の子どもたちが未来を考える一端となると考え、持続可能な社会を目指す子どもを育てる単元としました。

この単元は、第1部「様々な発電とエネルギーについて考えよう」と第2部「自然エネルギーで電気エネルギーをつくろう」の2部構成となっています。第1部の中で、子どもたちがグルー

ブに分かれてそれぞれの発電方法の資源性，地球環境への影響，経済性，安全性について調べて考えた後，日本のエネルギー事情の専門家の話を聞くという流れになっています。

そこで，専門家として経済産業省近畿経産局の当時の総務部長の方をゲストティーチャーにお招きし，特別授業を行っていただきました。大阪科学技術センターの方とも連携し，発電やエネルギーについて統計資料，絵・図等や体験コーナーなどによる学びが実現した。ここでの学びが，その後の第2部へとつながっています。

経産省のゲストティーチャーの方との打ち合わせでは，原子力発電を推進する・反対するといったことに直接触れるのではなく，そうした価値対立を含む問題について，しっかりと自分で考えられる子どもとなるような授業として進められました。

(2) 財務省と連携した財政教育

6年生の社会科学習の一環として，平成27年6月11日に財務省近畿財務局の当時の総務部長の方による財政教育特別授業を実施しました。

税務署による租税教室は長年にわたって実施してきており，税の意味や税金の使い方については，一定の理解を図る機会をもってきています。しかし，「財政」として国の収入と支出の両面について全体像を理解したり考えたりする機会，小学校においてはあまり持たれてはいません。

そこで，財務省近畿財務局の当時の総務部長の方をお招きし，「国の家計簿」と題した特別授業を行っていただきました。

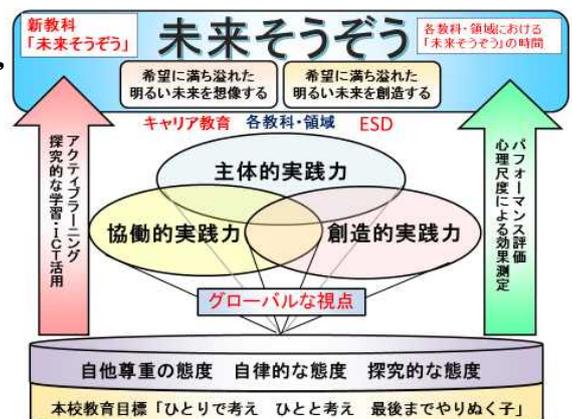
子どもたちにとっては，政治や税の仕組みを学習する前の授業であり，授業内容が理解できるのか懸念があったが，財務省HP「日本の財政を考える」内にある動画「大臣になった男」やゲーム「財務大臣になって財政改革を進めよう」を活用し，わかりやすく，かつ活動的に進みました。この試みがきっかけとなって，財政教育プログラムが全国展開されることとなりました。



(3) 文部科学省研究開発学校として取り組む「未来を『そうぞう』する子ども」育成の教育課程研究

文部科学省研究開発学校（H.28～H.31年度）として，「未来そうぞう」という主題に向けて，「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」という資質・能力の育成を目的とし，そのための教育課程及び教育方法，評価等についての研究を行っています。

これからの社会において直面する様々な課題に対して，人々は主体的かつ協働的に，人，社会，環境など様々なものへとグローバルな視点でアプローチし続けていくことが必要であり，これは希望に満ち溢れた未来の構築へとつながると考えます。そこで，希望に満ち溢れた未来を「想像」する，希望に満ち溢れた未来を「創造」するという二つの意味を兼ね備えた「未来そうぞう」を主題とした新教科「未来そうぞう科」を創設するとともに，「各教科・領域における『未来そうぞう』の時間」を設定し，希望に満ち溢れた明るい未来の構築に向けて，自分自身，社会，環境などに対して，グローバルな視点で具



体的なアプローチをし続けることができる「資質・能力」としての「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」を備えた子どもたちを育てることを目的とし、その教育課程に関する研究開発を進めているところです。



(4) 先進的な活用法を繰り広げる ICT 教育

ICT 教育への関心が加速的に高まっている中、本校では平成 23 年度 2 台のタブレット端末を導入したのを皮切りに現在では各学級 10 台、また、全教員に 1 台ずつを取り入れている。各教室の電子黒板と組み合わせながら、全教員が授業で学級活動で活用しています。

タブレット端末の活用について、apple 社のエデュケーション部門と連携しながら様々なアプリの授業での活用を試みています。同じテーマでの授業を小・中で同時に行いながらメッセージ機能で意見交換したり投票したりといった試みや、自動車販売店の方とビデオ通話機能でインタビューした後、学習を進めて実際に見学に向かうといった機器活用と直接見学を組み合わせた試み、個々の考えをアプリ上にアップして学級全員の考えをリアルタイムで互いが見える学び合いへの試みなど、様々に取り組んでいます。その取り組みは、「iTunesU」というアプリで見ることができる。「iTunesU」に小学校としてコースを設置したのは国内初のことです。

また、今年度から 2 年間パナソニック教育財団の特別研究指定校として「子どもが主役となる次世代の学び—BYOD（「Bring Your Own Device」の略称で、自身が所有するスマートフォンやタブレットなどの情報端末を持ち込んで利用すること）社会に対応するスマートデバイスの効果的な教育的利用—」の研究に取り組み、ICT 教育の新たなステージに進もうとしています。

(5) 保護者参画による学校づくり

わたしたちの学校には、保護者の方が毎日と言っていいくらい来られています。地域を越えて多くの子どもたちが通って来る学校ですが、PTA の委員会やサークル活動によって地域のコミュニティのような役割を果たしている側面もあります。そうした、学校を核にした保護者のつながりを活かす、また、学校教育への熱い思いをエネルギー源とする、保護者の方々による学校教育への「参画」によって、本校は支えられています。



その典型的なものが、“総合的な学習の時間”や“生活科”での子どものグループ活動の支援です。教員は保護者の方々にその日の活動のねらいや指導のポイントを伝え、保護者の方々は活動のねらいや指導のポイントを踏まえて自分が担当するグループを支援します。そして、カードにアドバイスを書いて子どもたちに伝えていただきます。すなわち、教員と同じ視点で子どもたちの活動を支えるということです。教員と保護者のチームティーチングとも言えるこうした学校教育への関わりを、わたしたちは「参画」と呼んでいます。

わたしたちの学校は、保護者の方々に「学校教育の当事者」として携わっていただくことで歩みを進めています。それは、「学びを創り続ける子どもたちの育成」をめざして進む、学校と保護者の二人三脚です。

(6) 子どもの思いと願いによって開拓される「平野ダッシュ村」

本校には都市部の学校としては珍しく、広大な敷地があります。大学校舎の跡地なのですが、こ

の土地を利用し、2002年、子どもたちは田んぼで米を作ったり畑で野菜を育てたり、日本テレビの番組「ザ!鉄腕!ダッシュ!!」をヒントに活動を立ち上げました。子どもがどんな思いを持っているのか、どんな活動がしたいのか、そのためにはどんなことに取り組みればいいのか、どんな問題があるのか、そして、どう解決すればいいのか、子どもの思い・願いにもとづく探究のサイクルによって、活動を進めています。地域の専門家の方にアドバイスをもらったり、参画の保護者の方の協力を得たりと、子どもの学習を中心として保護者・地域がつながる場になっています。



地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

各附属学校園がそうであるように、本校も研究発表会を開催し、地域・全国の先生方に教育実践研究の成果を発表したり、研究をさらに深めるためにご意見・ご指導をいただいたりしています。また、そうした経験をした教員が公立学校へ戻り、また、教育委員会や教育センター等に赴任して研究的側面から地域の教育に貢献できる学校です。しかし、それだけでは附属学校園に求められる役割は果たしていると言えないと考えます。

例えば、本校は「OpenCafe」と名付けられた若手教員・教職志望学生向けの授業講習会を開催しています。「附属の研究発表会」という少し高尚でハードルの高いものではなく、公開授業を見てそのままその授業者に授業づくりについて相談でき語り合うことのできる場を設けているのです。コーヒーを片手に日常の授業づくりの悩みをざっくばらんに。そうした貢献を通して、地域の中で教員研修の場として位置付けていると考えています。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

本校では、国立大学の附属学校園だからこそ受けられる教育をめざしています。上述の取り組みがその例です。財務省との連携、経産省との連携、パイロット的に進めているこれらの教育は、将来、我が国を背負って立つ子どもたちにとって、自分の頭を使って広い視野で先を見通して物事を考え、判断できるようになるための基礎となるものです。そうした教育が実現できるのが附属学校園だと考えます。

しっかりと自分の意見を持っている、それをしっかりと表明することができる、他者の意見を理解できる、そのうえでしっかりと議論ができる、議論に基づいてチームで課題を解決していくことができる、こうした資質や能力は一朝一夕には育成できません。そうした経験を数多く重ねた上で身に付くものです。

国立大学附属学校園は、知識・理解・技能の習得を包括して上記の資質・能力の育成について真正面から考え、先進的に取り組んでいます。我が国の将来を支える人材育成において、欠くことのできない存在です。